

『生理学テキスト 第8版』

(第1刷～第3刷)

正誤表

本書におきまして、下記の通り記載内容に誤りがございました。訂正してお詫びいたします。

- p.165 図10-1, p.166 図10-2および本文5行目, p.166 本文13～16行目
 - (誤) 毛様小体
 - (正) 毛様小帯

- p.267 上から17～21行目
 - (誤) K_{ATP} チャンネルは、内向き整流性Kチャンネル（心筋はKir6.2）とスルホニルウレア薬のピナシジルを結合するスルホニルウレア受容体（心筋SUR2A）の複合体である。心筋以外にも $I_{K,ATP}$ チャンネルは膵臓のB（ β ）細胞におけるインスリンの放出の抑制に関係する（図17-31参照）。ピナシジルは $I_{K,ATP}$ を抑制してインスリンの放出を増加する。
 - (正) K_{ATP} チャンネルは、内向き整流性Kチャンネル（心筋はKir6.2）とスルホニルウレア薬のグリベンクラミドを結合するスルホニルウレア受容体（心筋SUR2A）の複合体である。心筋以外にも $I_{K,ATP}$ チャンネルは膵臓のB（ β ）細胞におけるインスリンの放出の抑制に関係する（図17-31参照）。グリベンクラミドは $I_{K,ATP}$ を抑制してインスリンの放出を増加する。

- p.377 上から1～3行目
 - (誤) 下唾液核からは、副交感神経の顔面神経（VII）が顎下神経節に達し、節後線維が顎下腺および舌下腺を支配する。上唾液核からは副交感神経の舌咽神経（IX）が耳神経節に達し耳下腺を支配する。
 - (正) 上唾液核からは、副交感神経の顔面神経（VII）が顎下神経節に達し、節後線維が顎下腺および舌下腺を支配する。下唾液核からは副交感神経の舌咽神経（IX）が耳神経節に達し耳下腺を支配する。

『生理学テキスト 第8版』

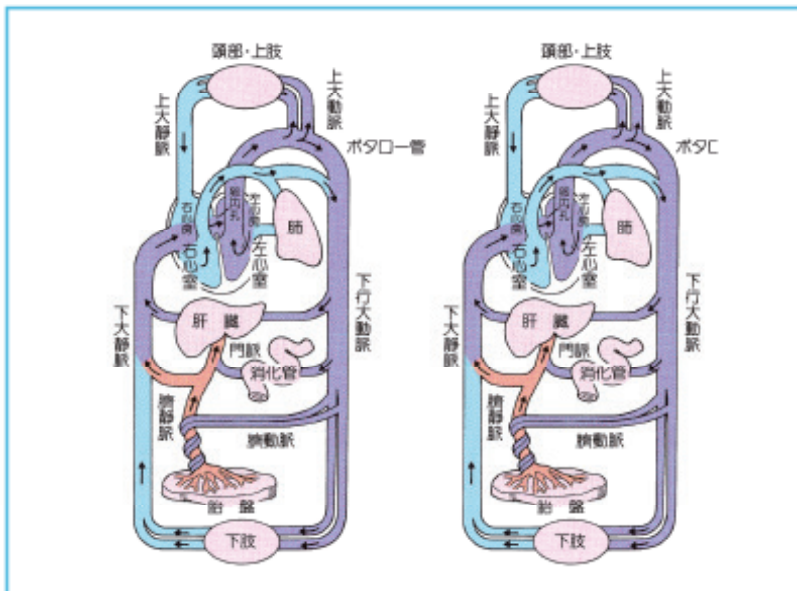
(第1刷～第2刷)

正誤表

本書におきまして、下記の通り記載内容に誤りがございました。訂正してお詫びいたします。

●p.453 図18-10

(誤)



(正)

